大森 春歌
OMORI Haruka

保育・幼児教育施設における造形ワークショップの意義と課題

A Study on the Significance and Issues of Art Workshop in Childcare and Early Childhood Education Facilities

芸術支援領域

本研究は、日本国内の保育・幼児教育施設へ継続的に造形講師が出張し、子どもを対象として造形ワークショップを行う意義と課題を明らかすることを目的とする。

本研究では、「造形ワークショップ」を、「講師やファシリテーターのいる活動を行う場で、画力の向上や知識の習得が主な目的ではなく、コミュニケーションや個々の過程を重視するもの。かつ、参加者が主体となり、共同で学び合う双方向的な創作の場」と定義し、外部から保育・幼児教育施設に定期的に出張し造形ワークショップを提供する、造形講師を研究の対象とする。

保育・幼児教育施設における造形ワークショップは、単独あるいは少人数で運営を行うことが多いため、実践者である造形講師の課題解決は自己完結している傾向がある。そのため本研究では、造形講師の課題を共有するとともに、その解決策を調査し検討することで、造形講師の困難を減少させる。また、造形講師の導入を提案することを通して、さまざまな課題を抱える保育者の負担を軽減し、保育・幼児教育施設の造形活動を充実させることが期待できる。また、客観的に課題の解決の糸口を提案することで、保育・幼児教育施設内外で子どもが造形活動に親しむことができる場の拡大に寄与することを本研究の意義とする。

すでに保育現場の造形活動を対象にした先行研究では、保育・幼児教育施設における造形活動には、さまざまな課題があることが示されているが、その解決策として示されているのは、保育者の研修の充実の必要性や、単発の造形活動の実践と提案などに留まっている。本研究では、それら保育・幼児教育施設における造形活動の課題を改めて調査した上で、その解決策の一つとして、具体的に継続的な造形講師の出張を挙げ、複数の観点から調査をする。

第 1 章

保育・幼児教育施設における造形活動の位置付けを探るため、幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の変遷を分析した。『幼稚園教育要領』を見ると、1998 年の改訂では、子どもが主体的に表現を楽しむことが重要視されるようになり、2008 年の改訂では、造形活動において、制作過程を重視し、他者との交流を促すことが目指されていることがわかる。さらに、2017 年の改訂では、自然とかかわり、五感を働かせるという点がより強調された。他方、『保育所保育指針』においては、1999 年の改訂で、様々な素材に五感を使って気づくことや保育士等や友達と共同することなどが、発達に合わせて様々な表現で、具体的に記載され、2008 年の改訂で、五感を使って身の回りのものに親しむという点が強調された。2017 年の改訂では、五感を使って対象に接することや、美しいものに感動する心を育むことがより具体的に記述されている。また、『認定こども園教育・保育要領』では、2017 年の改訂で、自然と関わりをもつことや、より五感や感覚を重視した造形活動が目指された。

これら、3 つの指針の変遷を見ると、改訂を追うごとに、制作過程に焦点が当てられ、他者と共同しながら五感を働かせて自然などの対象と関わる双方向的な造形活動が目指されていることがわかる。このような動きから、時代と共に、保育・幼児教育施設で求められている造形活動と、造形ワークショップの特徴との親和性が高まってきているといえるだろう。特に、2008 年の改訂では、他の幼児の表現に触れることや、表現する過程を大切にすることが具体的に記載されており、造形ワークショップとの親和性の高さがうかがえる。この 2008 年ごろは、造形ワークショップ研究の興隆期といえる時期とも重なる。

加えて、2017 年に改訂された 3 つの要領・指針の内容と、造形ワークショップの定義や特徴を比較すると、「協同」「双方向性」「制作過程」の面から共通点を見出した。また、中野（2001）がワークショップを語る上でのキーワードとして挙げた、3 つの語「『参加』『体験』『グループ』」[1] も、それぞれの要領・指針の中に重要なキーワードとして登場し、親和性を見出すことができる。

これらは、保育・幼児教育施設において目指されている造形活動を、造形ワークショップの実施によって実現できるということを示しているといえる。

第 2 章

保育・幼児教育施設を対象に行われた調査の参照に加え、保育者を対象に質問紙調査を実施し、造形活動の現状と課題を明らかにした。保育者の労働環境には多くの課題があり、労働時間の長さ、それに対する給与の低さ、ストレスの多さなどが挙げられる。保育者にストレスの要因を問うた調査では、資源不足が最も多い回答を集めたことを示した。このような現状は、造形活動の優先順位を下げ、保育者によって活動を充実させる余力を失わせる結果につながっていると推察した。資源不足には、造形活動を担う保育者の人手不足や、画材や素材にかける材料費の不足が含まれていると考えられ、造形活動の規模や内容を制限し、保育者の理想とする造形活動を実現できないという現状につながっていると考えられる。

また、筆者が保育者を対象とした質問紙調査を行った結果、全体的に園児の主体性を尊重し、園児が楽しめることやのびのびと取り組むことを保証したいという理想をもっている保育者が多いことが明らかになった。一方、造形活動の課題について、「課題を感じることはない」と回答した者は一人もおらず、保育者個人の努力や工夫で変えられる項目が上位にきていたことから、保育者はみな少なからず課題を感じている中で、現場にいる保育者の努力や工夫で、造形活動をより良くしようという意識が高いことがわかった。また、造形活動に使用する画材や素材について、購入や活用に悩みを抱えている保育者が多いことも示した。

第 1 章で保育・幼児教育施設の要領・指針を見てきたが、「表現」領域の中で何度も「保育士等」「教師」「保育教諭等」という言葉が登場した。それらは、それぞれの施設における保育者を指しており、子どもとかかわる保育者は、造形活動において、子どもたちの表現を受容し、双方向的な関わり方をする存在として必要不可欠であることが示されていた。しかし、本章で示したように、保育者には理想とする造形活動を実施する余裕がない場合も少なくない。既述の通り、保育・幼児教育施設で求められている造形教育と非常に近い特徴を持つ造形ワークショップは、当該の施設において、造形活動を充実させる役割を担う。これらを踏まえ、要領・指針に登場する保育者の存在を、保育・幼児教育施設で造形ワークショップを行う造形講師に置き換えることもできないだろうか。筆者は、保育・幼児教育施設において造形活動を提供する大人を、保育者に限らずとも、保育者と協働して子どもに接する造形講師が担うことで、現場の課題を解決することができるのではないかと提案した。

第 3 章

前章の課題を踏まえ、造形ワークショップの実施を担う造形講師に焦点を当て、造形講師と、それを受け入れている園長を対象に聞き取り調査を行った。調査において挙がった意義としては、「外部から施設に入ってかかわる側面」と、「定期的かつ継続的に実施する側面」の 2 つに焦点を当てたものに大別できた。前者には、出張しないと出会えない多様な子どもたちを対象にできる、保育者の意識に変化をもたらす、などの意見が挙がり、後者には、子どもたちの抵抗感が薄まっていく、子どもたちの成長や変化を感じられるなどの意見が挙がった。

これらは、第 1 章で述べた、「3 つの観点から、その性質に親和性がある」という結論と照らし合わせると、「協同」、「双方向性」、「制作過程」、すべての観点それぞれ当てはまる意見が挙がったといえる。加えて、第 2 章で述べた、造形講師は、保育・幼児教育施設の造形活動において、人手不足を補い、画材や題材を専門的な立場から提案し、保育者との協働相手になり得るという結論を証明する意見がいくつも見られた。ここまで、造形講師本人と、その造形講師を招いている園側の実感を整理することで、保育・幼児教育施設の現場において造形講師を導入することに十分意義があると感じられており、保育の現場における造形活動の充実に寄与する存在であるということが明らかになった。

しかし、造形講師の導入が全てを解決するというわけではなく、もちろん課題もあり、聞き取り調査を通じて挙がった課題を、本章では「外部からの出張に関わること」と「幼児に対する造形ワークショップに関わること」の 2 つに大別した。前者には、保育者との関係性や、日常へのつなげ方などが挙がり、後者には、安全性と自由度の確保などが挙がった。加えて、この 2 つの種類の課題が複合的に交わり合いながら発生する点に、保育・幼児教育施設における造形ワークショップの独自の特徴があると導き出した。

第 4 章

実際の事例を通じて、課題の対応策と造形講師の出張に関わる条件を明らかにした。保育・幼児教育施設における造形活動と造形講師が出張して行う造形ワークショップの条件としては、保育者と造形講師の関係性の構築が挙げられる。そのために、造形講師による日常的な保育者との意思疎通の努力や、保育者に向けた研修会の実施などは、解決の糸口となりうる方法の一つである。そのような取り組みが、継続的な造形講師の出張および、保育・幼児教育施設における造形活動の充実につながる。一方、造形講師の出張に際しては、保育・教育と美術の専門性の両面が必要とされ、継続的な関わりが可能である施設側との需要が一致した状態で、その認識の共有が重要であるといえることが明らかになった。

以上のことから、保育・幼児教育施設における造形ワークショップは、幼稚園教育要領等において目指されている造形活動の実現ができ、造形講師が保育者の不足を補う協働関係になりうることや、子どもたちが講師と継続的な関係を築けることなどに意義があった。しかし、造形講師の知名度の低さは課題であり、今後その価値が認知されていくことで、造形講師の存在が広がり確立されていくと結論づけた。

(1) 中野民夫『ワークショップ―新しい学びと創造の場―』岩波書店，2001 年，p.11

図 1　保育・幼児教育施設 4 における造形ワーショップの様子（筆者撮影）